

# 第129回 青春歌謡の名台詞に涙した 昭和の若者たち

台詞の入る歌謡曲といえば、二葉百合子や三波春夫の歌謡浪曲などが広く知られるところですが、青春歌謡にもドラマ性が強調された名台詞がいくつもありました。お気に入り

の御三家の名台詞といえば、まずは昭和38年発売の橋幸夫『白い制服』ですね。暴漢に襲われた橋の療養生活をヒントに可憐な看護師さんのことを歌った実話風歌謡なので、間奏で「君の白い制服……涙に咲いた花だった」(詞・佐伯孝夫)には説得力がありました。

翌昭和39年には、舟木一夫が学園ソングの有終の美を飾る名台詞を語ります。

「清らかな青春 爽やかな青春 大きな夢があり かぎりないよろこびがあった はかない希みがあり つらい別れもあった そんな時はいつも：母にも似た優しい目差しの君達がい そして 僕がいた」

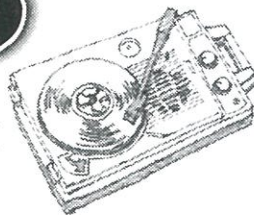
(『君たちがいて僕がいた』詞・丘灯至夫) 西郷輝彦は、デビュー2年後の昭和41年、デビュー曲『君だけを』の

続編ともいえる『僕だけの君』で「君を……しあわせにできなかったら どうしよう それでもいいって黙っ

## 名曲カルテ

# 昭和歌謡と いっまでも

堀井六郎 浦松本 絵



てついでてくれるかい それが好き きたいんだ：僕」(詞・星野哲郎)と 純愛を貫きます。

そして昭和42年3月、18歳だった 美樹克彦が昭和の若者の一途な想いを爆発させます。

「こんな悲しい窓の中を雲は知らないんだ どんなに空が晴れたって それが何になるんだ 大嫌いだ 白い雲なんて！」(『花はおそかった』

詞・星野哲郎) 自らの命でもあったかおるちゃんのために持参したクロッカスの花でしたが、病床の彼女はすでに息絶え、 美樹は再び訴えます。

「信じるもんか！ 君がもういない なんて：僕の命を返してくれ 返してくれよ！」

涙ながらに叫ぶ美樹の一言一言が 歌をドラマチックに盛り上げたところ で「君の好きな 花は 花は 花は おそかった」と嘆き歌い、最後



に「バカヤロー」と絶叫して終わります。美樹の前身は、日本教育テレビ(現・テレビ朝日)開局直後に放送された連続活劇ドラマ『風小僧』に出演していた子役・目方誠で、15歳くらいまではポール・アンカなどの米国カバーポップスを歌っていました。

昭和40年3月、美樹克彦と改名後、17歳での再デビュー曲『俺の涙は俺がふく』からして、フィンガースナップ(指パッチン)をしながらの「俺だってッ！負けてたまるかッ！」 「いまにわかるさッ！」の捨て台詞がカッコよく挿入されていました。

デビュー曲以後も『6番のロック』『回転禁止の青春さ』など、動きの激しいアクション歌謡を得意としていた美樹だけに、「死」という静的なテーマを台詞を交えて歌った『花は』は、意外性という点でもファン の目と耳を釘付けにし、年末の紅白

歌合戦でも披露、好評を博しました。少女マンガ調のお涙頂戴物語だったにもかかわらず大ヒットしたのは、言葉の明瞭に発しながらステージを劇場化してしまっただけの美樹の台詞回しと真摯な歌唱、そして、純情や清らかさが青春の象徴だった昭和という時代背景があったからでしょう。